

荻生徂徠の死因

杉浦 守邦

京都蘇生会総合病院

江戸時代の三大思想家の一人に数えられる荻生徂徠は、享保13年(1728)1月19日江戸で没した。享年63歳であった。彼の死因について医史学者富士川游は、原念斎の「先哲叢談」に「徂徠、浮腫ヲ病ミテ終ワル」とあるのをひいて、心臓病が腎臓病であろうとしている。徂徠が浮腫を病んだことは、徂徠の孫弟子が書いた「文会雑記」にも「徂徠ハ、浮腫ヲ煩テ死去ナリ」と有ることから、誤りなからう。浮腫を主症状とし、それが死因となる疾患としては、まず富士川が言うごとく心臓病、腎臓病が考えられるが、その外徂徠在世当時出現しはじめた衝心脚気も忘れてはならない。そのいずれであるか検討してみたい。

徂徠における浮腫の経過としては、徂徠の高弟太宰春台の「紫芝園漫筆」に、「年六十を過ぎ、旧疾しばしば発して、なお清心静養すること能わず。遂に篤疾を致して死す」とあることから、2~3年の慢性経過をたどったものであることが推定される。

疾患経過中に「旧疾しばしば発す」とある事から、浮腫の再発再燃をうかがわせるが、その実態については、彼の書簡(徂徠の学説を明らかにするため弟子達が、彼の文章、書簡を集めて編集した「徂徠集」にある)の中で、自分の健康状態を他に報せた部分を拾って検討してみることも有効である。

彼の死の前年享保12年夏安積澹泊に送った手紙に、「春月、書ヲ賜ハル、時に陰沴人ヲクルシムルニヨリ、夙疾婁々動ク。体中佳ナラズ。スコブル筆研ヲ厭ヒ、荏苒月ヲ過ゴス。呻吟ノ間、忽チ召見ヲ蒙リ、謁ヲ殿上ニ執レバ、則チ賀者門ニイタリ、マタ虚日無シ」とあることから、この年春から夏にかけて、再発があったことがわかる。「陰沴」とは陰証の妖気をいい、「召見」とはこの年4月1日將軍吉宗の拜謁を受けたことを言う)

又同年12月25日(死去23日前)谷大雅に送った手紙に「不佞、季秋、夙疾婁々動クニヨリ染病、荏苒以テ今日ニ至ル、尚ホ未ダ全クハ癒エズ。タダ近来薬餌盡有リ、頗ル瘥理ヲ覚ユ。カツ啖食シテ神ヲ精ニスルコト平日ニ減ゼズ。是レ憂イ無キノミ。謹ンデ此レ布告ス」とある事から秋の末にも又再発があったことがわかる。そしてこれが死に繋がったのではないかと推測されるのである。これらから病気の再発或いは再燃が繰り返されたこと、又最後まで知力・気力は十分であったことがうかがえる。

ただ徂徠の臨終にあたっての状況については中井竹山の「非徴」に、「徂徠の病むや、日々侍者に宣言して曰く『宇宙俊人の死に必ず霊怪あり、今当に紫雲の舎を覆う有るべし。汝等出でて之れをみよ』と。病せまるに及び、輾転呼号して、紫雲口を絶たず。……以て良死に非ずと為す」とある。これから死の直前に狂騒状態ともいえる脳症状のあったことが推測されるが、別に胸内苦悶を訴えたという記録はない。

以上徂徠の死因を考察するとき、心臓病や衝心脚気(脚気衝心の場合は、若年者に多く、むしろ急速に悪化して、心下塞迫・気急短息・苦惱甚大等の症状を示す)は否定されよう。最初から浮腫が主症状であってこれが再燃を繰り返したこと、病気の経過が2年にも及んだこと、安静が保てないため徐々に重症化していったこと、死に際して狂騒状態を呈して妄想または幻覚と見られる尿毒症様症状を示したことなどから、その死因を慢性腎炎と判断して誤りないものと考えられる。